

平成23年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）実績報告書（研究実績報告書）

1. 機関番号 3 | 2 | 6 | 0 | 4 2. 研究機関名 大妻女子大学
3. 研究種目名 若手研究（B） 4. 研究期間 平成22年度～平成25年度
5. 課題番号 2 | 2 | 7 | 3 | 0 | 4 | 7 | 4
6. 研究課題名 道徳性知覚による集団間葛藤解決過程の解明
7. 研究代表者

研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名
2 0 4 0 0 2 0 2	クマガイ 智博 熊谷 智博	文学部	助教

8. 研究分担者（所属研究機関名については、研究代表者の所属研究機関と異なる場合のみ記入すること。）

研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名

9. 研究実績の概要

下欄には、当該年度に実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、交付申請書に記載した「研究の目的」、「研究実施計画」に照らし、600字～800字で、できるだけ分かりやすく記述すること。また、国立情報学研究所でデータベース化するため、図、グラフ等は記載しないこと。

本年度は、外集団の道徳性を実験場面で操作し、それによって外集団との紛争場面での報復行動がどのように変化するかを中心に検討した。これは本研究課題の中心的テーマであると言える。具体的には実験室にて3人一組の集団を2つ作り、相互に利益分配を行うという設定で参加者には課題を行ってもらった。実際には他の参加者はおらず、コンピュータを相手に課題を行った。参加者は集団（参加学生の所属学部にて操作、あるいは無作為に割り当てられた、最少条件集団にて操作）を形成し、その内集団成員から平等な分配を受けるといった経験をした。その後、参加者は外集団成員同士の会話を聞き、外集団に対する印象を評定した。外集団の会話は道徳性に関する操作を行うために、2タイプ用意してあった。会話内容は両条件とも道徳的ジレンマについて、集団で選択を下す様子を録音したものであった。下された選択自体は両条件とも同じ（5人を救うために、1人を犠牲にする）であったが、その選択を下すまでの時間が操作された（10秒vs.1分）。その後、内集団成員（参加者本人ではない）が外集団から不平等な扱いを受けている様子を観察し、それに対して報復する機会（不快なノイズ音を9段階から選んで与える）が与えられ、その際に選択されたノイズ音の強さが攻撃の測度として記録された。結果は、同様に不公正な扱いをされても、外集団が道徳的な人々からなる集団であると知覚されている時には、報復が弱くという結果が得られた。しかしながら不公正さの程度を操作したところ、報復の強さは集団間での不公正な処遇によって大きく影響を受けており、その分銅特性の効果は弱くなってしまった。この事は集団間紛争に対する道徳性効果の限界を示唆している。

また本年度は道徳性効果をもっと広く捉えるため、外集団、特に近隣諸国の人々に対する道徳性知覚が、国防費の妥当性判断に与える影響について、基礎的な調査を行った。

10. キーワード

- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----|
| (1) 集団間葛藤 | (2) 道徳性知覚 | (3) 集団間接触 | (4) |
| (5) | (6) | (7) | (8) |